

産学連携こそ空洞化回避の直道。 産学のベストマッチングをつくりだす MF-Tokyoに大きな期待

社団法人日本塑性加工学会 産学連携委員会委員長
日本大学生産工学部 教授

高橋 進



ものづくりにおいて産学連携は古くて新しい、いつの時代においても重点項目としなければならない重要なテーマと考えています。とくに塑性加工は産業界の実活動にそったエンジニアリングが研究対象となるために、伝統的に産学が連携して研究開発をおこなってきたという経緯があります。塑性加工学会における活動においても産学が密接な関係を維持しながら、テーマ設定と研究活動の深化を推進してきたという実績を有しているのです。

しかしながら近年は経済のグローバル化に伴う生産拠点の海外移転が促進し、いわゆる技術の空洞化現象が顕著になることによるものづくり力の衰退・低下への懸念が高まっています。とくにリーマンショック以後はその流れが加速しており、改めて国内におけるものづくり力の強化が緊急の課題になっているとあっていいでしょう。そのためにも改めて産学が連携し、5年後、10年後を見すえた空洞化に対応できる新たなものづくりの枠組みをつくらなければならないのです。

そのような状況のなかで昨年、鍛圧専門展であるMF-Tokyo2009が開催され、主催者である日本鍛圧機械工業会からMF-Tokyoをベースにして共に塑性加工技術の活性化を図らないかとのお願いがありました。これは誠に時機を得たものであり、実際にMF-Tokyo2009には20の研究室が展示ブースを設け、会期中に18テーマの講演を行いました。現在多くの大学がオープンキャンパスを開催していますが、MF-Tokyoへの出展は日本塑性加工学会にとっての“オープンキャンパス”であり、3万人にせまる塑性加工に携わるあるいは関係者の方々に塑性加工学会の

活動を披露し、接点を得たことは大変に有意義であったと認識しています。

そこで重要となるのは産学連携を大手企業だけでなく、中小企業にまで広く参加を求め、裾野を広げなければならないということです。中小企業にはユニークな加工技術を有する企業が多く、実質的に日本のものづくりを担ってきました。加工ノウハウを蓄積した中小企業の現場力をベースに産学が協働すれば、新たな研究分野が生まれる可能性が高くなります。

3～4年前から注目を集めているサーボプレスは、学にとってもエポックメイキングであり、研究室の中に取り入れて加工プロセスのメカニズム解明を“学”が担い、“産”が応用技術を深めていけば新たな分野の創出も視野に入ってきます。サーボプレスを制御する応用技術すなわちソフトの蓄積を先行すれば、諸外国の追従を恐れる必要はありません。

空洞化をくいとめるには新技術の創出が必要不可欠です。現場のニーズ・経験と“学”の蓄積が融合すれば、今後に向け明るい展望を描くことができそうです。それだけにMF-Tokyoというフィールドが重要となってくるのです。MF-Tokyoという開かれた場で産学が出会い、ベストマッチングを構成できれば産学連携の幅がさらに広がります。来夏のMF-Tokyo2011には次代を担う若手研究者の積極的な参加と研究テーマの充実したラインナップを提示できるようすでに準備に入っています。MF-Tokyoが産学連携の大きな柱になるよう“産”“学”ともに心をつなげていきたいものです。

(談)